

『ふたつの蝶』

桑原 紀子

3月20日、図師の里山に行きました。

雑木林の小道を歩いていると、不意に、小さな黒い蝶が足元から飛び立ちました。まだ枯葉に覆われた地面近くを、チラチラとせわしなく飛び回り、すぐ姿を消しました。いなくなったかと思うと、木々の間を縫うようにまた現れます。

春の使者、ミヤマセセリです。ミヤマセセリは雑木林に棲む蝶で、幼虫はクヌギやコナラの葉を食べ、蛹で越冬し、早春、羽化して林の中を飛び回ります。年に1回、春しか現れない、春の妖精です。

春の妖精に会って4日後、近所を散歩しました。キブシが黄色いかんざしのような花をつけ、ツクシも伸びています。西緑地にまわると、菜の花や雪柳が花盛り。その

花達のそばに、菜の花のような黄色の蝶がじっとツツジの葉裏に止まっています。



よく見ると、越冬したキチョウでした。長い冬を生き延びて、再び春にめぐり合ったのです。鳥についばまれたのか、翅に少し傷がありました。

蝶の形で越冬、という厳しい生き方を選んだ蝶と、春になって羽化する生き方を選んだ蝶の違いはどこにあるのでしょうか？

それぞれの遠い祖先の生き方にまで遡るのかもしれない。

春は、出会いに心ときめく季節ですが、蝶たちの生き方の不思議さに心打たれる季節でもあるのです。